アナキズム と現代 講演録

鎌田慧

こんにちは、鎌田慧です。

今日は大杉栄とアナキズムの現代的な意味みたいな事をお話できればと思っています。

その前に近藤千浪さんについて少しお話させて下さい。近藤さんは6月20日に亡くなられましたが、6月5日に現代女性文化研究所というところが主催しました大逆事件の集会に来ていただきました。これは私に講師をやってくれっていう依頼があったんですが、大逆事件は私には荷が重いので、今日見えている明治大学の山泉進先生とそれから近藤千浪さんにお願いしました。

近藤千浪さんにお願いした理由は、山泉先生はずうっと大逆事件の研究をされておられるのですけど、近藤千浪さんは辞退されていました。でも、私はアナキストの友情関係といいますか、人間関係といいますか、それが今までの左翼運動のなかで、たとえばボルシェビキの運動が大体いつも対立になっていく、あるいは内ゲバで殺し合う。ソ連ですと粛清になるとかそういう殺人にまで進むような対立になっていきましたけれど、アナキストは徹底的に弾圧されていたこともあって、そのなかでの友情というのはとても美しいんじゃないかと思っていまして、それを近藤さんにお話しして欲しいというふうにお願いしました。

アナキストの友情といいますと、たとえば堺利彦さんが赤旗事件で獄中にいて大逆事件を免れるわけですが、大逆事件で12人が処刑されて、12人が死刑から無期懲役に減刑されます。堺さんはこれらの人たちをずうっと訪問して歩いていましたね。死刑になったその遺族であったり、獄中にある人たちを訪問して歩いていた。たとえば大杉栄も秋田刑務所にいた坂本清馬のところを訪問するとか、そういう徹底的に弾圧された時代に官憲の目をくぐって、あるいは尾行をつけたままいろんな所に行って遺族に会ってくるという、そういう麗しい関係があったんですね。その後、大杉栄が殺されまして、ギロチン社の復讐戦がありまして、和田久太郎とか古田大次郎が逮捕されて、和田久太郎は秋田の刑務所にいて、それも大逆事件の高木顕明のようにそこで首をくくって亡くなるという悲惨な状況がありましたけど、そういう弾圧され続けた中での友情、それはこれからの運動を考える時にすごく教訓になるんじゃないか。

残念ながら私たちは中核・革マルの内ゲバに対して何もしなかったし、何もできなかった。埴谷雄高さんぐらいしか、それを止めることをしなかった。それが運動の衰退をつくりだしてきた、と、そういうふうに考えています。個別に友情関係を証明するのは時間の関係でできないんですけれども、たとえば、私は比較的大杉の本を読んでいるので、大杉栄について言えば、大逆事件の被告の坂本清馬に手紙を出して、あの黒い箱馬車で裁判所まで行く時に、その檻車の隊列の光景は永井荷風の見た光景ですけど、囚人馬車で運ばれていく時に馬車の窓が目隠しされているから表が全然見えないだろう、というようなことを書いてやってますね。そういう思いですね。つまり、大杉栄は「春三月縊り残され花に舞う」と俳句に詠んでいますが、坂本清馬たちの運命を自分の運命と考えて、本を差し入れしたり、面会に行ったりなんかしています。そういうのがとてもいいなぁと思っています。もちろん堺利彦は売文社を作ってみんなの生活を考えるということをやっていました。そういう堺さんたちのことを近藤千浪さんにお話しして欲しいと思ってお招きしたのです。

その時に私は千浪さんの隣に座っていましたが、息がたえだえで苦しそうだったんですね。あ

れは風邪の影響だったんでしょうか。とにかく息がつまっていて、息が止まっているみたいな感じで私が心配して。だからその亡くなったっていうのをうかがってすごいショックを受けたんです。それが6月5日ですから、亡くなられる2週間ぐらい前の話です。でも、その後もう一度講演に行かれたというのを聞いていますので、ちょっと荷が軽くなったような思いをしたんですけれど。

千浪さんは真柄さんが子どものころ、床の間に骨壺があったということを話していたっていうのを記憶されていました。骨壷っていうのは大逆事件で殺された人たちの骨壷が堺利彦、真柄さん親子のところにあったんですね。管野須賀子の真柄さんにあてた遺書が残されていますね。それで、真柄さんは近所のガキ達におまえのウチは天皇を殺そうとしたウチだっていうふうに、いじめられたっていうことを聞いていた、とおっしゃっていました。私の関心は千浪さんが子どものころいじめられなかったかどうかということにあったのですが、ご本人はそれはなかった、とおっしゃっていましたね。

この集会を主催した現代女性文化研究所っていうのは、東京の巣鴨に望月百合子さんのお宅が、木造の小さいウチがありまして、そこを事務所に使ってあまり立ち入った話をするとあれですけれど、望月百合子さんが残していたお金を運用していろんな文化運動をやっている団体です。望月さんはジャーナリストとして、私などの言うまでもない、石川三四郎さんの養女ってことになっているんでしょうかね。そしてずうっと100歳まで生きられていて、亡くなった時に遺言でその建物を残し、そこを事務所に集会を開いたり、機関誌を発行しています。ですから、みんな継がっているんですね。そういう人間的なつながり、石川三四郎、望月百合子、堺利彦、大杉栄、近藤憲二、近藤真柄、近藤千浪というふうに、個人的な関係がいまでもずうっとつながっているネットワークがある。共産党の運動とはずい分ちがいがあると思います。いかがでしょうか。風媒社の稲垣喜代志さんもお見えになっていて、稲垣さんは共産党の運動に詳しい方ですが。その人間関係の深さがアナキストとボルシェビキの違いとしてあるんじゃないかっていうのが、一つの私の問題意識です。

近藤千浪さんにはじめてお会いしたのは、大杉栄を書くときに写真をお借りしに行って、千浪さ んと白仁成昭さんにお会いして、快く写真をいっぱい貸してもらったことがあります。先ほど司 会者もお話してたように、大逆事件、アナキズム、あるいは大杉関係のカレンダーを毎年つくら れて、それはとても貴重なカレンダーで、年が終わっても捨てられない、もったいなくて捨てら れないカレンダー(アナキズム文献センター発行)をもらっています。それから静岡の沓谷霊園 で行われる大杉栄の墓前祭でもお会いしたり、こちらの橘宗一忌でもお会いしたりしていました 。伊藤ルイさんには大杉の関係で資料を借りに行ったり、亡くなる前にもお見舞いに行ったり して、比較的お付き合いさせていただいたんですけど、ものすごい感じが似てますね。両方ご存 知の方はたぶん、私の意見に賛成して下さると思うんですが、感じがおんなじで、どうしてお二 人はこんなに似てるんだろうって、いつも不思議に思ってました。目をよく見開いて、ルイさん は大杉ゆずりで目がでっかいんでしょうけど、お二人とも目を見開いてよくものを見てるという 感じがします。それは迫害を受けて、これは私の勝手な解釈ですが、迫害を受けていた人が相手 、社会を見据えているっていう、そういうまなざしっていうか、目なんじゃないかなぁっていう ふうに思います。歩き方もすごく楽しそうな歩き方をするし、やっぱり自由な風が吹いているっ ていう、そういうお二人だったと思います。それがアナキストの運動が伝えたものじゃない かなぁ、というふうに考えたりなんかしています。

その日、その講演会の日は、千浪さんは大逆帖を持って来られて、それを会場で見せておられました。それは後から「大逆事件の真実をあきらかにする会」が復刻しましたが、500部くらい作ったでしょうか。山泉先生にうかがえばいいんでしょうけど。私も一冊古本屋で買って持っている自慢の秘蔵品なんですが、大逆事件関係者の手紙、肉筆の手紙をコピーして、幸徳秋水が堺さんにおみやげに持ってきたアメリカのアルバムに張りつけたものですね。それからもう一つ、「週刊平民新聞」の創刊号、1903年11月15日の創刊号の現物ですね。ボロボロじゃなくきれいな、きのう発行したような感じの新聞なもんですから、みんな驚いたんですけど、ああいう感じで千浪さんと自仁さんのところで、ものすごくきちんと資料を保存しているんじゃないかと思います。それがそのカレンダーになって毎年わけてもらってるという、そういうことになっています。

大逆事件については、私はまったく不勉強なんですけど、最近、名誉回復の運動がずうっと 広がってきまして、「名誉市民」にするということがありました。名誉市民はナンセンスだとい う意見もあったりしたようですが、それはやっぱり歴史に対する考え方が浅いと思います。たん に普通の市民を名誉市民にするということではなかったわけで、一つは天皇を殺すという、具体 的な準備もすすんでいない、でっち上げ事件によって12人も殺されている。その名誉を回復でき るということは、天皇制がいま民衆を支配していないっていうことの証明だと思います。天皇制 が強力にある間は天皇制に反対して殺された人に対しての同情は湧かない。同情心は持たれない わけですが、今、天皇制の名のもとに殺された人たちの名誉を回復するっていう運動が起きて きて、それが地方議会で成立するってことは、天皇制の桎梏から、呪縛から解放されてきている 。完全に解放されているわけではないですけど、解放される契機ですから、それはやはり名誉市 民として打ち出していくっていうのは、最も重要なことだと思います。

もう一つ、名誉市民にするってことは、死刑にされたことは100メートルの海底に沈められていたものと同じなわけですから、大逆事件という、天皇を殺すという形で処刑されたり、無期懲役になったり、獄死したり、自殺したりした人たちにとって、その海底から少しづつ浮上してきたわけで、ようやく水平線上に顔を出す、出せるようになった、ということでもあるわけです。ですから旧中村市、四万十市のこれは労働組合の方たちが中心だったでしょうけど、そこで名誉回復して墓前祭が始まっています。それは中村市ご出身の山泉先生にお話をうかがえば一番いいんですが、新宮でもそういうふうになってきていて、ようやく100年を迎える時になって、あの大弾圧が天皇の名のもとにおける無政府運動、あるいは反体制運動、あるいは反戦運動に対する弾圧であった、というのが市民的レベルで理解されるようになった。100年もかかったということですね。

そのあとがこの大杉栄の事件になるわけです。ですから、私のテーマは、大杉栄の思想っていうのはどういうのであるのか。もう一つは軍隊が虐殺したっていう意味ですね。もう一つはやっぱりアナキズムの可能性というもの。今の運動、これからの運動にとってアナキズムの運動はどういう可能性を持っているのかということを考えていくことだろうと思います。千浪さんのお父さんの、近藤憲二さんの『一無政府主義者の回想』はとてもいい本でして、さっきのポスターが「大杉栄と仲間たち」というポスターだったのですけど、あの「仲間たち」と言うのはなかなか意味深いと思っています。ロシア語で言うとドゥルークとか、フランス語ではアミでしょうけど、同志(タバリシチ)よりも仲間っていうほうが自由な関係であって、開けている関係みたいな気がしますよね。

そういう自由な風、同志っていう仲間についてこの近藤憲二さんの本にはよく書かれていまして、たとえば私が好きなのが、大杉栄のうちにいたユキちゃんという、ここでは「女中さん」と書いてますけど、お手伝いさんについて書いているところです。ユキちゃんという女中さんが、「お友達の娘さんを自分の部屋に連れてきて、幾日か面倒を見ていた。女中さんに居候がくるのだから、居候には都合のいい奥さんに違いない」奥さんというのは野枝のことです。それから「銭が茶ダンスの引き出しに入れてあって、皆が自由に遣った」というふうに書いてます。女中さんという人がいるわけですけど、女中さんの友達がどんどん居候に来ている。ほかの居候もしよっちゅう来るわけですけど、女中さんの居候も来る。お金は茶箪笥にあった。それを和田久太郎が書いていたか、ちょっと覚えていませんが、とにかくその茶箪笥の引き出しに、お金があって、それを皆で自由に引き出して使ったっていう、そういう人間関係が描かれていて、そこから仲間たちの関係性が見えてくるような気がします。

近藤憲二さんは、今日お墓参りに行った、私が言うまでもない事ですが、橘宗一さんのお母さん のあやめさんと事件のあと結婚された方ですね。そこにも、アナキストの関係性がよく現われて いると思います。近藤憲二と大杉栄が北九州へ浅原健三に会いに行ってますね。浅原健三は言う までもなく、『鎔鉱炉の火は消えたり』、八幡大争議の主人公です。あの本は黒表紙で、煙突が デザインされて、月が掛っているって図柄かな。その『鎔鉱炉の火は消えたり』は浅原健三の著 述です。大杉が北九州の小倉から、小倉を過ぎて、戸畑を過ぎてそれから八幡の駅にむかう途 中に、右側は全部八幡製鉄所の長い塀ですね。望楼がついている長い塀があって、いまは鎔鉱炉 がなくなってしまって、いま一基だけ残されているんですが、とにかく博多にむかう線路の右側 がずーっと八幡製鉄所になってます。東田高炉工場って鎔鉱炉が6基あったんですけどね。その煙 を見ながら大杉は「僕は10年前に当地を通過した時、車窓から幾尺となく突っ立った巨大な煙突 を見て、友人と共にこの煙突は一日でも止められたら死んでもいいと話したことがある。一昨年 、僕が獄中で寒さに苦しんでいた時、突然八幡の煙が止まった。同盟罷業が勃発したとの報知だ った。5年前まで労働運動があまり重大視されず、暖簾に腕押しの状態にあった。しかるに今日で はこの煙が止まったくらいで死んでもいいといえば諸君は笑うであろう。それほどまでに運動は 進んだ」というふうに書いてますけど、あの鎔鉱炉の火を止めてみたいというのは左翼の願望で して、浅原健三はそれを止めたんですね。

これは彼の『鎔鉱炉の火は消えたり』に書かれてますけど、本工労働者だけのストライキではないんですね。本工だけじゃなくて職夫とか現業職夫とか、つまり日雇い労働者が一致して止めたわけですよね。だから、半分以上が職夫、日雇い労働者が入っていたわけで、彼らは、車馬通用門という下請工専用の門から出入りしていたんですね。浅原健三は東京に来て、大杉栄たち、和田久太郎とかそういう人たちと交流していて、それでこの鎔鉱炉の火は消えたり一の大争議をやったわけで、これはアナキストの運動であったし、正社員だけでない差別されていた日雇い労働者たちの運動でもあったわけです。浅原健三も本工をクビになった西田健太郎も日雇い職夫として、蓑をきてわらじ履きで中に入っていた。だからちょうど今の状態にものすごく似ているわけです。いまも派遣労働者がどんどん工場の中に入っていて、半分ぐらいの下請け・日雇い労働者がいるわけで、鎔鉱炉の火は消えたり一をやろうと思ったらできるんですよね。ただアジテーターがいないだけで残念なわけですけど。そういう下層労働者がどんどん増えることによって、そこから叛逆が起こった、それを組織していた運動があったということを、大杉栄や近藤憲二の本が描いています。

私は実は大学を終えてから「鉄鋼新聞」というのに入りました。その頃、製鉄業が基幹産業なので、それを知りたくて入ったわけです。そのあと、この東田高炉で働いた事があります。労働下宿という暴力団が経営している飯場が東田高炉のすぐ目の前にありまして、そこへ行けばすぐに採用してくれます。芦屋の競艇場とか、小倉の勝山公園でウロウロしている連中をみんな捕まえてくる。ええ仕事があるよとか、金稼げるよとか言って、ポンビキっていうかタコつりをやってどんどん下宿に連れてくる。飯場を暴力団が管理して逃げられないようにしている。そこに行ってその東田高炉っていうところで働いた事があります。鉱炉の上にどんどんどんぞんて行

って、スコップを持って登って行って、鉄鉱石を海岸からずうっと鎔鉱炉まで運んでくるんですが。ベルトコンベアーというのは振動が激しいから、鉄鉱石が下にどんどんどんどん落ちて、積もっちゃうとコンベアーが動かなくなるから、日雇い人夫がその下を掘って、ベルトに返してやる仕事。それが「ベルト下」っていう仕事なんですけど、その「ベルト下」の仕事をやったことがあるんです。韓国の浦項製鉄っていうところに見学に行ったことがあったのですが、そこでも下請工が同じ仕事をやっていて、すごく懐かしい気持ちになったんですけれども。そういう労働者たち、今の派遣労働と同じような労働者たちが反乱を起こしたことがあったわけです。

ダイレクト・アクション、直接行動というのはなにも暴力行為じゃなくて、そういうストライキとかゼネストとかデモ行進とかいうのを含んでるわけですけど、なんとなく「アナキスト=ー人一殺」みたいに極端なイメージにされたのは、やっぱり権力側の宣伝だ、と思います。

今日、墓前でお参りした橘宗一は6歳だったわけで、6歳の子どもを殺すという、ほんとにとんでもない犯罪です。大杉栄と伊藤野枝が殺されたこと自体でも、何の罪状もないわけですからね。逮捕もしてない、逮捕状もない。それで連行してなぶり殺してしまったわけですけど、子どももついでに巻き添えにしたという。それが軍隊の本質だったと思います。軍隊だからできたわけで、これは結局、軍隊とは何かっていうことをきわめてとらえやすい形で示していると思います。戒厳令下にあったわけですけれど、この時は警察の留置所に「保護する」という形があったわけで、警察の方がまだ軍隊のように殺さないということですね(その後、小林多喜二を殺害しましたが)。つまり、軍隊が殺す集団であるっていうのが、大杉栄、伊藤野枝の虐殺、橘宗一の虐殺に示されていると思います。ですから、いま、日本の政府も抑止力とか言ってるわけで、平和憲法というのは軍隊を否定してるはずなのに、今の政府でさえまだ抑止力、戦争を防ぐのは軍隊であるということをいってるのですが、まったく嘆かわしい事です。軍隊は殺人集団で、戦争勢力なのです。

大逆事件を完全にでっち上げたのは、日露戦争から朝鮮併合、そしてアジア太平洋戦争に向かう間に起きた、反軍思想を弾圧した事件です。大杉栄は縊り残され一といいましたけど、その後、12年しか生きられなかったわけで、12年たってやはり殺されたのです。この時代っていうのは、ずうっと語り継がれる必要があると思います。軍隊がいかに凶暴であるかという事だと思います。

大杉栄の考えで、私は面白いというか、特徴的に思ったのは、伊藤野枝が谷中村に関心を持って渡辺政太郎の谷中村の報告をきいて感激したのを見て、大杉栄がもう一度考え直すというシーンがあります。それはきわめて象徴的、左翼の象徴的なシーンだと思っています。これは辻潤と伊藤野枝が別れる決定的なシーンとはいえませんが、かなり重要なことだったと思います。

つまり、野枝が谷中村の悲惨な報告に興奮しているのを辻潤が見て、こういうふうに言ったんですね。「この谷中村について何の知識もなく、自分の子どもの世話さえ満足にできない女が同じような態度で興奮したことがぼくをおかしがらせたのである。しかし、渡辺君のこの時のシンシヤーな話しぶりは、彼女を心の底から動かしたのかもしれない。そうだとすれば僕は人間の心の底に宿っているヒューマニズムの精神を笑った事になるので、いかにも自分はエゴイストであり、浅薄でもある事を恥じ入る次第である」と言っていますね。つまり、辻潤は皮肉屋ですから、谷中村の報告を聞いて興奮している野枝をみて、子どもの世話も出来ないくせにって、笑っちゃったわけですね。でも、それはやっぱりまずかったというふうに辻潤は自己批判しています。でもこれは後の祭りなんですね。

それで、大杉栄はどうしたかっていうと、大杉栄は「N子が、(野枝ですね)あれほどまでに感激し、興奮したY村の事件に対して、僕はどんな態度でいたろう。官憲の無法には勿論憤りもし、また村民の悲惨には勿論同情もした。しかし、ただそれだけならどんな冷血漢にだってできよう。それ以上に、僕は何を感じたか。また、何をしたか。僕はなんにもしない。そしてただ村民がみんなおぼれ死んでしまえば面白いと思った。助けられるんではつまらないと思った。僕

がふだん冷血漢のように憤慨している人々よりも、もっと冷酷な、もっと無情なことを考えて いた」というふうにいっています。

これは左翼特有な発想でして、悲惨が極まれば極まるほど、運動が力強くなってゆく意識っていうのは多分にありますよね。やっぱり生ぬるいよりも徹底的に弾圧されたり、ひどい目にあってるほうが、革命的情勢は激化していくという、そういうふうな倒錯があると思います。するとごく人間的な感性で同情したり泣いたり憤ったりしてる、その感情をなくしてきたっていう自己批判なんだと思います。ほかの場所に大杉は書いています。「どれほど他人を虐げるものがあっても、またどれほど他人に虐げられるものがあっても、少しもそれを不審に思わない感情を僕は養ってきた」というふうにもいっています。つまり、すべてのものが「自明の理」で資本主義社会っていうのはそれだけひどいものである。だいたい左翼は分かっているわけで、どんな状況が来てもそれは階級社会の矛盾であるからと弁えている。そんな理知とか自明の理っていうのはいかに無残かっていうことですね。少しもそれを不思議に思わない感情を養ってきたという、左翼的に分析すればするほど資本主義固有の矛盾としてとらえるわけですから、何があっても驚かないという。するとこういう伊藤野枝に代表される感性をどう生かすかというのを、大杉はそこで粛然として悟ったのだと思います。このどんな冷血漢よりも冷血漢であったという自己批判ですね。

この辻潤と大杉の関係のなかに運動に対する感性の問題が表れていた、というふうに考えられます。大杉栄の新しさっていうのは、今から見ると僕らある程度左翼運動をやってきた者たちの陥りがちな感性の鈍磨とか落とし穴を、彼はそこに落ち込まないで突破しよう、突破しようとしたことだと思います。だから彼は色々書いてるわけですけど、たとえば有名なのでは「社会的理想論」でして、「労働運動は労働者にとっての人生問題だ、労働者は労働問題というこの白紙の大きな本のなかに、その運動によって、一字一字、一行一行、一枚一枚ずつ書き入れていくのだ」ということを言ってますね。この白紙に一字一字、自分たちで書き入れていく、それが理想であってそこから光が放たれるっていう労働運動の精神ですね。労働運動はたんに物取り主義じゃなくて、一人ひとりの労働者が、そこに自分の人生を書き込んでいくんだという、まぁ、文化運動でもあるわけですけど、そういうのをこの大正時代に言っていました。

その後の、それも60年代以降の日本の労働運動は、そういうことにまったく無関心になっていって、企業内に閉じ込められてしまった。

ほかにもいろんなことを彼は書いていて、その、主体としてどうするのかってことが一つのテーマだったと思います。もうちょっとだけ読ましてもらいますと「運動には方向はある。しかしいわゆる最後の目的ではない。一運動の理想は、そのいわゆる最後の目的のなかにみずからを見出すものではない。理想は常にその運動とともない、その運動とともに進んでいく。理想が運動の前方にあるのではない。運動そのもののなかにあるのだ。運動そのもののなかにその型を刻んでいくのだ」(「秩序の紊乱」)というふうに書いています。とにかく運動に勝つために、とかいって妥協なんかやっているけれど、その運動自体の中をきちんと点検しなければいけない。運動をやっている中にこそ理想があるわけで、理想はその運動の彼方にあるわけじゃない。これはよくある言い方で、たとえば太田薫さんは春闘をずーっとやってきた人ですけど、彼が春闘で団交している時に、「糞のついた一万円札でも一万円札は一万円札だ」ということを言ったんですね。ところが労働者はどうでしょうかね。今みたいに切羽詰まってくるとどうか知らないが、そこまで落ち込むかどうかですけど、「糞などついた一万円札は要らない」というのが労働者のプライドなんですよね。

そこを労働運動がどう考えてきたかっていうことですね。もう一つ、たとえば、大杉流に労働 運動は労働者の自己獲得運動、自主自律的生活獲得運動である、人間運動である、人格運動で ある。こういうふうに言うと、今の労働運動家は労働運動は精神運動ではない、モノ取りの経済 闘争である、というふうに経済闘争が中心であるっていうふうに言うでしょう。しかし、経済闘 争ばかりやってきた今の日本の労働運動はどうかっていったら、政治闘争は全然できなくなって しまったわけですね。沖縄がどうなってもストライキもしないって運動になってしまったわけで 、それはこの一人一人の労働者が自分のなかに光を見ていく、自分の人格を向上させて行くって いう、それにまったく無関心だったからですね。

僕らもよくやってきたわけだし、まだそれに行ったりなんかしますが、だいたい集会ってい うと、動員が精一杯で、大きい組合だったら交通費に弁当つき日当つきで動員したわけです。僕 がそういう事を言ったら、批判があって、金もらって動員されて行ったことはないっていう人も いるわけですが、それは勿論そうで、大きい単産がそういうことがあったわけで、小さい組合は金なんか払っていない。一緒くたに言うとかなり混乱するんですけど。しかし大単産というか大きな組合、まして民間大企業、あるいは総評でも、大きい組合ですね、それはだいたい動員費を払っていたわけです。それで集会に行くと日比谷・音楽堂なら日比谷音を全部満タンにします。壇上にはだいたい幹部が雛壇のように並んでいて、それで上から演説をして演説が終わると分列行進というか会場の外に向かって集まって出発して行くっていう、そういうことをずうっと繰り返してきていて、それが運動の成果だっていうふうに考えられてきたわけですね。

それで民間大企業の組合は、そのなかで、まあ自動車もそうですし、鉄鋼もそうですし、電機もそうですし、 あと、造船ですね。ほとんどその組合の選挙は小さい職場単位で投票用紙を集めるっていう形にしたんですね 。だから、その職場では反対票が出ないわけです。その職場で反対票が出ると、すぐあいつだっていうふうに分 かるような形の投票箱の集め方をするわけだし。それから執行委員選挙に立候補するときは、だいたい50以上の 推薦人を集めるとか。現執行部に反対する人を50人も集めないと立候補できないとか、過去にソ連なんかそうい う形でやってきたのかもしれない。そういうふうに少数派を規制して、労働組合を生産性向上運動に役立つ組 織に変えてしまったわけです。 それにたいして大杉栄は、一人づつ白紙に字を書いていくような運動が必要だってことを言ったわけです。つまり白紙に字を書くような主体的な運動を拭い去ってきたのが、今日の結果を示していた。大杉はきわめて平明な形で、アジテーションとして書いていたわけです。それがもっとひろく伝わっていく必要があると思っています。大杉の言葉によくあるのは、自由っていう言葉でして、たとえば自由な発意、自由発意と自由合意という言葉ですね。自由に発想して自由に合意していくという、官僚的な統制のない、自分たちで決定していく自主運動だってふうに言ってますけど、その自由の精神であったと思いますね。だから八幡製鉄の争議もそうだったし、それから東京下町の地域運動も自由参加でやっていたわけで、それが戦後になって組織を作ってから、組織を確立してから運動するっていう、そういう運動に変わってきたんですね。つまり、組織が小さいうちに運動して、運動しながら自分たちの意識を変えていくという発想がなかったわけですよね日本の労働運動は。だいたい組織が固まってから、安心して要求を出して行動していくという、つまり、要求を出しながら運動を進めて組織を固めていくっていう発想じゃなかったですね。だから大杉のような発想は自由分散主義とか極左冒険主義とかそういうふうな言葉をよく投げつけられたわけで、とにかく我慢していればそのうちに革命のチャンスがくるという、そういうふうな抑さえ方をしてきたと思います。

それにたいして、最近の派遣労働者の運動というのは、大組織が介在しないで、介在しない状況の中から新しく生まれてきた地域運動とか個人加盟の運動でして、派遣ユニオンとか、コミュニティ・ユニオンとかの組合が出来て、さらに外国人労働者の救援活動なんかやっています。そういう個人参加でやっていく、つまり、大きな運動体がそれこそ官僚統制によって何もしない中で、少数反対派が現れて外に出たり、あるいは地域で個人加盟の組合を作ったりなんかして、そこで自由闊達に動くようになって、派遣労働者などのいろんな救済運動をやるようになっています。

大杉栄が、どうして実存主義的な運動論を作ったのかというのは、それはよく分かりませんけど、ただ陸軍幼年学校に行っても徹底的に教育された。雑誌も見せないし、表に出るのも不自由ながんじがらめの生活をさせて、それで軍人を鍛えて、その狭隘さによって日本は敗戦を迎えるわけですが。東条英機もそうだったし、甘粕正彦大尉も陸軍幼年学校から陸大という、そういう軍隊的桎梏が、組織が、骨身にしみて嫌だったろうと思います。甘粕について言うと、甘粕に全部押しつけて日本軍は平然としていたわけですね。これはいかにも汚いと思いますね。いっさい憲兵隊の上部が関知しない形で、大杉と野枝と宗一少年の虐殺を甘粕一人に罪を押しつけてしまった。このカモフラージュの仕方とか、隠し方っていうのが、日本の陸軍を、海軍もそうでしたが、象徴しています。この軍隊の凶暴さっていうのは、沖縄での虐殺や「集団自決」にずうっと引き継がれていきます。だから軍隊的なものに対して反発した大杉が、それとまったく対極の自由に向かっていったというのは、とても教訓的なことだと思います。

これからのアナキズムの可能性の問題です。今、フリーターの救済運動っていうのは、路上生活者に声をかけて、話を聞いて生活保護の方に誘導するとか、あるいは住宅を確保するとか、あるいは弁護士を付けて多重債務を清算する。野宿生活者には医者に来てもらって診断してもらうとか、そういう総合的な運動になってきましたよね。昔のように組合を作ってそれで賃上げをしていくって運動だけじゃなくって、いろんな生活面をカバーするのが必要になってきたってことですね。地域のなかで、弁護士とか医者とか行政書士とか、それから活動家とか市民運動家とか、そういうバックアップする層が重層的に重なってきたと思います。これが最近の特徴です。生活、生命にかかわる運動です。日比谷に現れた派遣村っていうのは、そういう一つの根拠地だったわけです。ですから、あれをやっていた弁護士の宇都宮健司さんとか湯浅誠さんとか、そういう人たちはそれまでそういう運動をやってきた人なんですね。今度「日弁連」の会長になった宇都宮さんは消費者ローンとか多重債務の救済運動をずうっとやってきたわけで、日本の貧困のなかから現れてきた暴力的な借金取りを解決してきた人ですね。

湯浅さんは山谷にいて野宿労働者を支援してきた人で、労働運動から入ったんじゃなくって、そういうボランティア活動からやってきた人ですね。それがいろんな少数派の運動と結び付いてああいう日比谷公園の派遣村をつくって、それがいろんな地域で同じような運動をつくってきました。

名古屋でも派遣村をつくってやってきたはずですね。それから日系ブラジル人の救済運動とか、 名古屋が中心です。労働運動全体でみると、たしかにほんとにとことん分裂させられて解体され つくしたように見えていても、そこからもう一度若い人たちの新たな運動が始まってきたんです

ですから、ちょうど大杉たちが東京の下町で、労働者と一緒の運動をやっていた時期とかなりだぶってきたんじゃないか、そういうふうな感じがあります。そういう地域の小さいいろんな運動が、ネットワークでどう結びついていくかというのが、これからのテーマでして、今の小さい組合を大組織にしていくっていう発想は、昔の運動のパターンだと思います。つまり小さいのを大きな組織にしていくっていうのは、たとえば大企業のなかにいて、少数派がどんどん大きくなって多数派を形成していくっていう、ところがいまはなかなかそうはいかない時代になってきたんですよね。なかなかそういう情勢にはならない。

しかし幾つか多数派を形成したケースっていうのはありまして、例えば日本航空の、いまJALっていうと笑い話になっちゃうんですけど、かつてJALが勢いがよかった時に、副操縦士たちの組合がどんどん弾圧されて7人ぐらいまでしか残らなかったのが、もう一度7人から多数派を占めるところまでいったというケースがあります。それから羽田沖事故ってのがありましたけれど、これは機長が管理強化によって精神的なダメージを受けて、ああいう事故を起こしたんですけど、それから機長会が、機長会というのは管理職だったんですけれど、管理職が立ち上がって機長会を労組にして、安全運転を要求するようになったとか。JR西日本の尼崎事故のあと、労働者と被害者の運動がつながるとか、幾つかの例があります。あとはいろんな大工場での少数派の運動は、少数派として自立して運動をしていく方向にむかっていく、と思います。

そのキーワードはやっぱり相互扶助ということだと思います。大杉がクロポトキンの「相互扶助論」を訳したのはかなり早い時期でして、この相互扶助の精神をどう広げていくか、それがいま問われていると思います。

それからもう時間なので結論的に言いますと、最近アナキズム論については、チョムスキーの論 文が本になったり、あるいはイタリアのアントニオ・ネグリの本が読まれるようになってきま した。ネグリの『マルチチュード』っていう論文は私は評価していまして、いろんな階層の多種 多様な運動体が一緒になって政治化していくっていう、そういうネットワークの運動をつくって いく方向ですね。それはいままでの日本みたいに大組織があって、上から命令すると下まで一網 打尽につながっていくという、まあスターリン主義的といいますか官僚的といいますか、そうい うふうな組織運動でない。いろんな地域、いろんな運動体にある根茎と言いますか、根っこのネ ットワークとしてつながっていく。そういう多様なのがこれからの可能性を示しています。

日本でも市民による公害・薬害・ダムなどの住民運動がひろがってきています。こういう今までのボルシェビキの運動とはちがう、上意下達方式、組織を大きくして全国に影響力を示すという、そういう運動ではない。小さい組織でも根っこのように、根と根とがつながって、線となり、面となって、いろんな場で解放区、根拠地、コンミューンをつくっていくという、そういう運動になっていくんじゃないかと思います。ですから大杉の本は今どのくらい読まれているのかよく分かりませんが、もっともっと読まれる必要がある、と思っています。以上です。どうもありがとうございました。



近藤千浪さん追悼/橘宗一少年の墓前祭 記念講演 2010年9月12日 愛知労働文化センター

アナキズムと現代 鎌田慧講演録

http://p.booklog.jp/book/55484

発行者: 虹霓社/コウゲイシャ

著者プロフィール: http://p.booklog.jp/users/kougeisha/profile

感想はこちらのコメントへ http://p.booklog.jp/book/55484

ブクログ本棚へ入れる http://booklog.jp/item/3/55484

電子書籍プラットフォーム:ブクログのパブー (http://p.booklog.jp/)

運営会社:株式会社ブクログ